

学校教育ビジョン										
【学校教育目標】 「自分も人も大切にできる きんひがの子」 ～夢をもち、心豊かに、自ら学び行動できる児童の育成を目指して～			1. 教育活動に関する重点努力事項 確かな学力・豊かな心・健やかな体の育成 ～知・徳・体のバランスのとれた児童の育成～			2. 学校経営に関する重点努力事項 ① 組織的な学校運営 ② 教職員がやりがいを感じながら、生き生きと働ける学校づくり				
評価の項目	今年度の重点目標	具体的取組	主担当	現状及び取組状況	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	備考	判定結果 (中間)	判定結果 (最終)	今後の改善策
①教育課程・学習指導	「より主体的に取り組むことのできる児童の育成」に取り組む。	・教育課程の工夫(カリキュラムマネジメント)に取り組む。「より主体的に取り組むことのできる児童の育成」の実現をめざす。 ・BE THE PLAYERプランの計画・実行。 ・児童自身が「自分で」「自分から」取り組む意識を育むために、学習集会や振り返りなどの機会を設ける。	教務主任 研究主任	言われたことには、素直に取り組むことができる児童が多い。しかし、授業を進めるのは自分だと意識は低く、学習の難易度が上がるにつれて、自分から取り組むことの難しい児童も増える。	【満足度指標】 児童アンケートを行い、各自の学習の取組を振り返らせる。	「自分から」「最後まで学び続ける」学習に取り組むことができた答えた児童の割合が A 90％以上である。 B 80％以上である。 C 70％以上である。 D 70％未満である。	1学期末と2学期末に児童アンケートを行う。	A	自分が主役の授業に向かって「自分から」「最後まで」できた」と肯定的評価をした児童が94.9％であった。「(そう思う)が63.8%、「まあまあ思う」が31.1%」毎月の学び集会により、クラスごとに児童にめあてをもち、取り組むことができたことが数値に表れていると考えられる。また、全体的には、意欲的に取り組んでいる児童が多いが、意欲がもちづらい児童や集中が続かない児童もあり、教師の支援によって自分が主役の授業に向けて取り組んでいる児童もいると考えられる。2学期は、児童自身が自分が主役として取り組めるような授業改善をさらに進めていく。児童が自分で選択して決めていく場面を意図的に設定し、教師の見取りと手立てを充実させ、児童が「授業を進めるの自分から」意識的に取り組むことができるように指導する。	
②生徒指導	主体的に考え、行動する児童を育てる。	・6年生を中心として主体的に行動することの良さを全校に伝える。 ・高学年を中心に縦割り活動や委員会活動、運動会等の行事を企画し、全校で取り組む。自主的に活動している姿を価値づける。 ・前後期中中の委員会や学期途中の係でも、それぞれの活動をふり返る場を設ける。	生徒指導部	言われたことは集中して取り組む児童は多い。自分たちで学校を良くしようとする意識が低い。	【満足度指標】 児童アンケートを行い、自信が主体的に考え行動できたかを振り返らせる。	「学校生活の中で自分で考えて動くことができた。」と答えた児童の割合が、 A 90％以上である B 80％以上である C 70％以上である D 70％未満である	1学期末と2学期末に児童アンケートを行う。	A	1学期末生活アンケートで「あなたは学校生活(係や委員会活動など)の中で自分で考えて動くことができましたか?」という質問に「できた」と答えた児童が94.2%だった。係活動や委員会活動で児童が目的を持って活動することができたと考えられる。委員会活動は1学期を振り返り、児童それぞれの今後のめあてや頑張りたいことを立てることができたが、係活動に関しては、学期途中に自分たちの仕事を振り返る時間はなかった。2学期途中に自分たちの係活動を振り返り、学級を運営していく立場としての自覚を持つ場を設定する。児童会活動においては、代表議会の仕組みを明確にし、全校でスムーズな情報共有を行えるようにする。児童自身が代表議会を運営することで「自分	
	いじめや不登校の未然防止の視点、生徒指導の4つの視点を生かした授業に取り組む。	・生徒指導の4つの視点を生かした授業づくりに取り組む。チェックシートを活用し、具体的な声掛けや、働きかけの方法を示す。 ・生徒指導担当による授業公開や教員間で授業交流を行い、授業力向上を図る。	生徒指導主事	昨年度の取組から、職員間の「生徒指導4つの視点」を意識した授業に対する意識は高まって来ているもの、職員間で視点を共有したり、振り返りを行う場はない。	【努力指標】 チェックシートを活用し、月ごとに各自で自分の取組を振り返る。	各月の重点項目を意識して授業したと答えた教員の割合が A 90％以上である B 80％以上である C 70％以上である D 70％未満である	毎月教職員のチェックシートを行う。	B	5月と7月のチェックシートを累計した、重点項目を意識して授業できた教員の割合が86.4%だった。「(できた)が40.9%、「大体できた」が45.5%」だった。5月の重点項目「一人一人を褒めよう」では「できた」の割合が54.5%で半数以上を占めていたもの、7月の重点項目「表情やつぶやきを見取り、寄り添った支援をしよう」では「できた」の割合が27.3%だった。教師の振り返りには「見取ることができたが必要に合わせた支援ができなかった。」「見取った児童に対し、構いすぎた。」といった内容が見られた。重点項目を設定する際、具体的な声掛けなどを教員に示す必要がある。	
③キャリア教育・進路指導	目標をもって生きようとし、自分の成長を振り返ることができる児童を育てる。	学習や行事、日常生活の中で自分の長さに気づき、自ら考えて行動するための指導を行う。また、キャリアパスポートを活用し、1年間のめあてを立て、学期ごとに振り返りを行う。	学習指導部	児童においては、自分の課題を見つけた、目標に向かって粘り強くやり遂げたりすることへ自信を感じる。より主体的に高めるためにも、児童一人一人が「なりたい自分」に向かって、自己実現を図っていく必要がある。	【満足度指標】 児童アンケートを行い、「よりよい自分に向かって成長できた」かを振り返らせる。	「よりよい自分に向かって成長できた」と答えた児童の割合が、 A 90％である B 80％以上である C 70％以上である D 70％未満である	1学期末と2学期末に児童アンケートを行う。	A	1学期末に行った児童アンケートにおいて、「よりよい自分に向かって成長できた」と肯定的に回答した児童の割合が94.4%、「(そう思う)が63.9%、「まあまあ思う」が30.5%」であり、ほとんどの児童が成長を実感している。日々の授業だけでなく、校外学習や縦割り活動、総合ハッピープロジェクト、あいさつ運動など、成長を実感できる機会を設定することができた。活動前には個のめあてを持てるようにし、そのめあてに向けて活動できたかをふり返る機会を設ける。児童が成長を自覚できるよう声かけやコメントなど、ポジティブなフィードバックを家庭へ返して、成長を価値付けしていく。	
④保健管理	自分の生活を振り返り、健康な生活習慣を確立するために自分で考え行動することができる児童を育てる	・毎週の生活チェックで、健康行動の振り返りと、できていない場合は改善していく。 ・児童のスクリーンタイムを短くし、その分「早寝」や「運動の時間」をのばす。 ・メディア使用と心身の健康の関係について、関心や危機感をもてるよう児童・保護者へ働きかける。	保健主事	昨年度のアンケート結果から、児童の健康課題として、①スクリーンタイムが長い②睡眠時間が短い③基礎体力が低い実態がある。スクリーンタイムの長さが児童の健康生活習慣や体力の向上に悪影響を及ぼしている現状がある。	【努力指標】 各学年で、メディアとのつきあい方について考えさせる指導(集団指導・個別指導)を年4回以上行う。	メディア機器とのつきあい方を児童に考えさせる指導が、 A 年4回以上できた。 B 年4回以上できた。 C 年3回以上できた。 D 年2回以下であった。	各学年の実施状況を確認する。		4月の学年懇談会での啓発や、家庭学習強化週間と合わせた「メディア・コントロール」の取り組み、1学期末前の「メディア・マスターカード」などの取り組みの機会をも活用し、中間評価までに各学年平均3.5回メディア機器とのつきあい方についての指導ができていた。6月に行ったメディアコントロールでは、学校全体の68%の児童が時間をコントロールし、メディア機器を使用することができるようになり、2年生以上で前年度を上回る成果が見られた。一方で、学年ごとの実施回数に多少の差があることや、残る3割強の児童への対応が課題である。2学期も計画的な指導と、児童が自律して実践できる場を継続して設けていく。	
	児童の発達段階に応じて、敏捷性の向上を目指す。	・全学年共通の準備運動として、ラダートレーニングやなわとび運動を行う。 ・縦割り活動や委員会活動のイベントを通して、楽しみながら敏捷性の向上に取り組めるような活動を児童が主体となりに行う。	体育・健康部	昨年度の身体テストで、敏捷性の項目(50m走)において4年女子(現5年)、5年女子(現6年)、4年男子(現5年)の記録が県平均を下回っている。	【成果指標】 5月に比べ、スポチャレ1しかわの種目「40m走」の記録が向上する。	40m走の記録が向上したクラスの数が A 6学年 B 4学年 C 2学年 D 1学年以下	・5月に1回目の計測を実施する。7月に2回目、11月に3回目の計測を実施する。	C	スズキやいしかわの種目「40m走」について、5月に比べて7月の記録が向上した学年は3学年だった。1学期は体育の授業のウォーミングアップとしてラダートレーニングを導入した。新しい取り組みで楽しんでいる様子であり、結果から走力の向上にも一定の成果が見られたと考える。2学期は授業内だけでなく、委員会等も活用し、子どもたちが主体となって体力づくりに取り組めるような活動も行ってきたい。	
⑤安全管理	自分の命は、自分で守ることができるよう、いざという時には自ら考え判断して行動する児童を育てる	各学年に1回以上、避難訓練を実施し適切な経験を通じ、自分の命を守るためにはどのようにしたらよいか考えられる児童を育てる。	教頭 安全教育担当	ほぼ100%の児童が、避難訓練の際、指示に従うことはできている。しかし、緊張感に欠ける児童が高学年に数名みられる。自分で考え、正しい行動をとることを目指している。	【満足度指標】 自分の命を守るためにどうしたらよいのかを自分で考え行動できる。	自分で考え適切な行動ができた児童が A 95％以上である。 B 85％以上である。 C 75％以上である。 D 75％未満である。	避難訓練後、児童に振り返りのアンケートを行う。	A	ほぼ100%の児童がしっかりと放送を聞き、ふさげず本書を想定して緊張感をもって避難することができた。高学年児童の訓練に臨む姿勢がよく、低学年のよい見本となっている。避難後の話を聞く姿勢にさらなる改善が見られるとよい。	
⑥特別支援教育	個々の児童の特性を理解し、必要な支援を行いながら、多様なあり方を認め合えるように働きかける。	・支援を要する児童について個別の記録をこまめに残す。 ・児童理解の会で課題や支援の方法について教職員の共通理解を促す。 ・専門家を招いての校内研修会を持ち、児童の特性やユニバーサルデザインへの理解を深める。	特別支援教育コーディネーター	・学級で困り感の強い児童については、校内支援委員会を持ち、カウンセリングや専門講師、医療機関につなげている。 ・本校のSSRでは、教室に入れない児童の個々の状態に合わせた対応ができるようになっている。	【努力指標】 研修会や月1回児童理解の会を持ち、支援の方法において検討して共有し、児童の支援に生かすことができる。	校内研修や専門相談等で学んだことを実践に生かそうと努めた職員が A 95％以上である B 90％以上である C 80％以上である D 80％未満である。	1学期末と2学期末に教職員にアンケートを行う。	B	肯定的回答の割合が90.9%であった。毎月のアセスメントや児童理解の会での情報共有により、個に応じた支援・言葉かけ・手立てが定着しつつある。一方で、授業を進めることを優先にしたため、即時対応ができなかったという声も聞かれた。また、気になる児童への迅速な支援連携体制を今後、さらに意識していく必要がある。	
⑦組織運営・業務改善	明るく元気に児童と向き合うことのできる心身ともに健康な教職員の姿を目指す	業務の見直しを進め、精選と合理化を行う等の工夫をし、自らの働き方について考える。また、連携・協同を進めることで、業務改善に努める。	教頭	職員の3分の2が、見直しを持ち優先順位を考えた、見直ししたり等の工夫をしているが、業務が多岐にわたっているため改善できていないと感じている。中でも校務分掌の議案作りや生徒指導案件での対応に多く時間をとられていた。保護者や地域の理解を得ながら、笑顔で児童に向き合う時間を増やすために具体的な取り組みを行い、業務改善を	【成果指標】 業務の精選(削減)、連携合い、分掌内での整理を工夫しながら進め、時間外勤務時間を月45時間以内にすると(昨年度達成率63%、延べ人数計算)	時間外勤務時間の月合計が45時間以内の教職員が(達成延べ人数/14×月数) A 90％である B 80％以上である C 70％以上である D 70％未満である	時間外勤務時間記録から計算する。	D	45時間以内の時間外勤務は、4月は42.8% 5月41.3% 6月50%という結果で3か月の平均は、44.7%であった。1学期は、年度当初と同じくもあり、学級事務、校務分掌に多くの時間をとれている教職員が多く見られた。時間外勤務時間が長い教員にさらに声をかけたり、校務分掌に偏りがなく、過度の負担が個人にかかっていないかをチェックして見ていく必要がある。	
⑧研修	国語科を中心に授業改善を図り、研究主題である「主体的に学び続ける子の育成」を目指す。	国語科「読む」単元を主として、単元デザインシートを活用すると、付けた力を確実に身に付けるとともに、児童が「やってみよう」と思える魅力的な言語活動を設定し、児童が自律した学びとなるよう授業を構想する力を付ける。	研究主任	国語科を中心に学校研究を進めてきた。教員は付けた力を軸に言語活動を設定する意識を持つようになっている。児童が高い意欲をもち、「やってみよう」と思える言語活動にするために、単元デザインシートを活用し、児童の実態に合わせた授業改善を図っていくことが必要である。	【満足度指標】 児童アンケートを行い、国語科において、「自分なりのめあてをもち、最後までやり切ることができた」と感じている児童の割合が、 A 80％以上である B 70％以上である C 60％以上である D 60％未満である	国語科において、「自分なりのめあてをもち、最後までやり切ることができた」と感じている児童の割合が92.4%であり、「(そう思う)が59.3%、「まあまあ思う」が33.1%」、「児童が学び続ける工夫を行った」教員の割合が90%であった。今年度は「自分が主役」をキーワードに、「自分から」「誰とでも気持ちよく」「最後まで進み続ける」という3つの学び方を示している。毎月学び集会を開き、児童の学びのよさを価値付けていく。また、1学期は4、6年で研究授業を行ったこともあり、単元の見直しや付けたいか言語活動を教員が意識できた。読むこと単元において、作成した単元デザインシートをもとに、児童に具体的なゴールを設定したり、学習計画を立てて児童に見通しを持たせたりする工夫を行った。さらに、「0年生に発表する」「図書館に置く」など、具体的なゴールを設定したことで、児童もゴールに向かって学び続けることができた要因となったと考える。外部講師を招請し、国語科の授業づくりについて学んだり、教材研究をしたりする機会を設けることができた。2学期も読むこと単元について単元デザインを作成することを通じ、児童の実態に合わせた手立てを考えていく。児童が見通しと目的を持ち、「もってやってみよう」「できそう」と思える魅力的な言語活動を設定し、より主体的に学習に取り組む児童の育成を目指す。	A	国語科において、「自分なりのめあてをもち、最後までやり切ることができた」と感じている児童の割合が92.4%であり、「(そう思う)が59.3%、「まあまあ思う」が33.1%」、「児童が学び続ける工夫を行った」教員の割合が90%であった。今年度は「自分が主役」をキーワードに、「自分から」「誰とでも気持ちよく」「最後まで進み続ける」という3つの学び方を示している。毎月学び集会を開き、児童の学びのよさを価値付けていく。また、1学期は4、6年で研究授業を行ったこともあり、単元の見直しや付けたいか言語活動を教員が意識できた。読むこと単元において、作成した単元デザインシートをもとに、児童に具体的なゴールを設定したり、学習計画を立てて児童に見通しを持たせたりする工夫を行った。さらに、「0年生に発表する」「図書館に置く」など、具体的なゴールを設定したことで、児童もゴールに向かって学び続けることができた要因となったと考える。外部講師を招請し、国語科の授業づくりについて学んだり、教材研究をしたりする機会を設けることができた。2学期も読むこと単元について単元デザインを作成することを通じ、児童の実態に合わせた手立てを考えていく。児童が見通しと目的を持ち、「もってやってみよう」「できそう」と思える魅力的な言語活動を設定し、より主体的に学習に取り組む児童の育成を目指す。		
					【努力指標】 単元デザインシートを作成し、「児童が学び続けられる工夫を行ったか」を振り返る。 A 90％である B 80％以上である C 70％以上である D 70％未満である	教員アンケートを行い、「児童が学び続けられる工夫を行ったか」を振り返る。 A 90％である B 80％以上である C 70％以上である D 70％未満である	1学期末と2学期末に教職員アンケートを行う。	A		
⑨保護者、地域との連携	学校と地域(家庭)が目標を共有し、連携・協働しながら、児童の学びや成長を支える。	コミュニティスクールの活動を実施化させ、保護者や地域の方に教育活動に参画してもらい、学校の教育活動を充実させる。	教頭	昨年度は、各学年平均4回連携した活動を行った。今後、道徳科授業の支援者ティーチャーとしてや実技教科の支援者として更なる協力を依頼し、共に子供を育てる体制づくりに努めていく必要がある。	【努力指標】 家庭や地域との連携による授業や活動を、年4回以上行う。	連携した授業や活動が各学年 A 年6回以上できた。 B 年4回以上できた。 C 年3回以上できた。 D 年2回以下であった。	各学年の実施状況を確認する。		5年生の家庭科の裁縫の授業で地域の方や保護者の方と連携した授業を行うことができた。ただ、1学期はその授業のみしか連携することができなかったで、道徳科や生活科などさらなる連携を考えて充実した教育活動が行えるように工夫していく必要がある。	
⑩教育環境整備	教室や特別教室等、児童の学習環境を整える。	教材教具や児童の学習道具等の整理整頓に努め、学びの空間を工夫し、児童が主体の学びの環境を整える。	教頭	PCLームの学びの空間を整え、児童が自分の学び方に応じて活用できるようにした。今後、その他の特別教室や学習ルームの整備も進め、児童の学びが充実するように整備していく必要がある。	【努力指標】 全教職員で定期的に備品・教材の整理整頓を行う。児童の実態に応じた学びの場を整備する。 A 85％以上である B 75％以上である C 65％以上である D 65％未満である	備品・教材の整備及び学びの場の工夫ができたと答えた割合が A 85％以上である B 75％以上である C 65％以上である D 65％未満である	1学期末と2学期末に教職員アンケートを行う。	A	肯定的な回答は90%であった。教室や保健室の整理整頓、ユニバーサル表示、手に取りやすい掲示物の工夫などを行うことができた。今後は、児童が自ら学びの場を選択できる工夫や「きんひがルーム」をはじめとした共有スペースの有効活用を考えていく必要がある。	
学校運営委員会での評価、助言										